

小説

豊田行二

下関市
(1936～1996)



【著作】

『だれも知らない』（昭45・山口新聞社）
『消えた三億円』（昭47・三一書房）
『小説示談書』（昭55・春陽堂書店）ほか

豊田行二の作家的資質は、社会派としての、そのエンターティメント性にあった。処女作『示談書』が飯沢匡らに激賞され、『オール読物』新人賞に続き、直木賞候補にも挙げられた。見も知らぬ青年の原稿に大枚の賞金で遇す僥倖に感激して、豊田は政治家志望の夢を捨て、ペン一本の世界に没入するため上京した。ちょうど高度成長期に活躍した流行作家、梶山季之・藤原審爾らの「オールラウンド・プレイヤー」の世界を視野に入れていたようだ。初期の『示談書』『消えた三億円』『青春国会劇場』など、インサイド・ストーリーテラーというべき情報小説の分野に作家として席を占めた。のちに官能小説家として生涯刊行数四百五十冊を超える膨大な作品を量産するが、東南アジア、中近東地域に取材した国際企業の野望と挫折の物語は、情報小説家の面目を恣にし、多数の読者を得た。豊田にとって、読者はクライアント、編集者はプロデューサー、作家は娯楽を提供する職人だと徹底した意識をもった。

「面白い小説―たとえ読み捨てにされるものであっても―といえども、作者が苦しみ抜かなければ読者が一緒に楽しんでくれるような作品は生み出せない。私は面白い小説を書くことを常に念頭に置いているが、他人が大衆小説と冷笑するものでも、一作ごとに全力投球をしている」（『作家前後』）。

豊田はトータルに言えば、官能小説の量産作家として出版界に記憶されるが、郷里山口県を舞台にした、洒落な作品も少なくない。

山口新聞連載「だれも知らない」は山口県を縦横に取材、とくに萩焼などに一言をもっていた。しかも作家転進の動機が、下関在住時代、文学同人誌『午後』の古川薫、中原雅夫、清永唯夫らとのあこがれの交友にあり、羨望の限りの刺激を受けたと折りにふれて告白している。七十年代、下関の文学風土は古川薫をはじめ、赤江澤、長谷川修、壱岐光生、豊田行二と、芥川賞・直木賞候補作家の存在が多様な個性を放ち、多彩だった。

（文・武部忠夫）



出版300冊記念



愛蔵品

豊田行二 年譜

（提供・渡辺佳代子）

昭和11（一九三六）年		5月11日、山口県下関市丸山町に生まれる。 幼少時から父（銀行員）の転勤で山口県内を移住。 下関市立日新中学校卒業。
昭和26（一九五二）年	一五歳	山口県立下関西高等学校卒業。 早稲田大学教育学部卒業。 在学中、「雄弁会」で活躍。
昭和29（一九五四）年	一八歳	早稲田大学大学院経済学研究科・修士課程修了。 4月、下関に帰り、『防長新聞社』記者となる。のち、青年政経グループ「新人会」を結成、代表となる。
昭和34（一九五九）年	二三歳	国会議員代議士私設秘書。 政界への進出を夢見ていたが、健康すぐれず病氣療養中、ベッドで手すさびにユーモア小説を書き、山口昌高の名で投稿、採用された。 当時、下関の文学同人誌『午後』のメンバー、古川薫、清永唯夫らの刺激を受け、本格的に作家を志す。
昭和36（一九六一）年	二五歳	5月、結婚。三人の娘に恵まれる。
昭和39（一九六四）年	二八歳	6月、『示談書』（雑誌『オール読物』掲載）で第32回文藝春秋『オール読物』新人賞受賞。同じく『示談書』が第59回直木賞候補となる。
昭和43（一九六八）年	三三歳	11月、単身上京、文筆に専念。 第59回直木賞候補。
昭和44（一九六九）年	三三歳	以後、作家として「オールラウンド・プレイヤー」をめざし、政治小説、推理小説、官能小説の分野で多彩な筆をふるう。 10月、郷里下関に帰る。加療のかたわら旺盛に執筆。 11月7日、腎臓疾患のため死去。享年60歳。 出版数450冊。
平成4（一九九二）年	五六歳	
平成8（一九九六）年	六〇歳	

《豊田行二著作リストより》

『作家前後』 大陸書房
『灼熱の野望』 角川書店
『ひかり号殺人事件』 双葉社
『オイル・ギャンブラー』 青樹社
『背面の敵』 ダイヤモンド社
『秘書室の殺人』 講談社

私はもう一度、この上関に来るかも知れない。そうして、オチヨ口舟の女達が素足で願をかけたように、私も生きた玩具から解放されるようにと祈らなければならなくなるかもしれない。その時は、哲也さんは別の世界の人になってしまっているだろう。

映子は女中の話に耳を澄ませながら、そんな悲しいことを、ふと考えたのだった。

秋穂にくらべて、上関の一夜は賑やかだった。

夜遅くまで酔った男達が大声で話す声が聞こえたかと思うと、早朝から暗い海に出ていく漁船のエンジンの響きが聞こえた。しかし、賑やかではあったが、それは車の排気音や女達の嬌声とは違った素朴な賑やかさだった。一生懸命に生きている人達の生活の音だった。

映子はほとんど眠らずに朝を迎えた。これが、哲也との最後の夜かと思うと、どうしても眠れなかった。

映子と迎える最後の朝になるとは夢にも思っていない哲也は、無邪気に朝食をパクついた。しかし、映子は何も喉を通らなかつた。

旅館を出ると、ふたりは船で室津に渡り、そこからバスで柳井へ出た。

「君は広島へ行くのだったね」

柳井駅の待合室で哲也は寂しそうに言った。

「広島の種類へどうしても行かなければならない用事ができたの」

「すぐ済むのだったら、一緒に行ってもいいのだよ」

「ううん。広島の種類で一泊するの」

「それは残念だな。仕方ない、一人で帰るよ」

「ごめんなさい」

「何もあやまることはない。楽しい旅だったよ」

哲也はにっこり笑った。しかし、映子があやまったのは、哲也をひとりで帰らせてしまっからではなかった。映子はたった今、初めてで最後の嘘をついたのだった。

（『だれも知らない』（山口新聞社）より抜粋）